

財団法人東方研究会／東方学院

東方だより

第十八号

【本部 (東京本校)】
〒101-0021
東京都千代田区外神田2-17-2
延寿お茶の水ビル 4階
TEL 03-3251-4081
FAX 03-3251-4082

【関西地区教室】
〒533-0033
大阪府大阪市東淀川区東中島
5-27-44 崇禅寺
TEL 06-6322-9309
FAX 06-6321-7695

URL <http://www.toho.or.jp>

十八号目次

理事長ご挨拶
近況行事報告
新春研究発表会
東方学院講師紹介
研究会員の声
研究員紹介／「閑話本題」
上半期行事報告／芳名録
財団法人東方研究会からのお知らせ

8 7 6 5 4 3 2 1
頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁

理事長ご挨拶

「中村元先生の生誕百年を迎えるにあたって」 前田専學



八月六日、八月九日、八月十五日に加えて三月十一日が、日本人の記憶から消し去ることの出来ない日となりました。このニュースは直ちに世界中に伝えられ海外からもお見舞いと励ましのメールや手紙が私のところにも参りました。未曾有の天災と人災からの一日も早い復旧・復興を祈らざるを得ません。

このような状況の中で、誰しも被災された方々に何かして上げられることはないか、といてもたつてもいられない気持ちになります。財団法人東方研究会としても、何か東方研究会らしい貢献の仕方があるのではないか、という思いに駆られます。

来年の十一月二十八日は、財団法人東方研究会の創立者故中村元博士の生誕百年に当たります。この機会に中村先生が財団法人東方研究会を設立された意味を再確認し、中村先生が求められた高邁な理想を求めることこそ、我々としてなすべき事ではないかと思つて至りました。

中村先生は、一九二二年、世に「戦争の世紀」といわれる二十世紀初頭に生を享けられ、一九九九年に亡くなりました。ご生前中には、戦死者数は数千万人にも達するという二度の世界大戦に遭遇され、第二次世界大戦の時には、短い間でしたが応召され、また焼け野原の東京を目の

当たりにされました。しかも大正十一年には、地震による惨害に加え、各所に発した火災のために、大東京の大半と横浜・横須賀の全部が焼き尽され、死傷者数は数えきれず、その損害程度にいたつては、実に世界有史以来と伝えられる関東大震災をも体験されました。

そのような人間と人間が殺し合う不条理な戦争や、人間の弱さをいやと言つほど知らされる大自然の計り知れない威力を体験されながら、先生は、東西の哲学、宗教、歴史、文化などを広く深く探求し、思索を深め、多数の著作を刊行されました。

先生が生涯かけて真理の殿堂を窮め尽くして最後に到達されたのは、ほかでもない「慈悲」の精神でした。「慈」はすべての人に真の友情をもつことであり(与楽)、「悲」はすべての他人と悲しい心情を共にする(抜苦)ことを意味します。先生は「この慈しみの心づかいをしつかりとたもて」と多磨墓地にあるお墓の横に石碑を建てブツダのこぼを刻され、後世に残されました。

こころの支えや絆の強化が求められているこの時に当たり、当研究会では、先生の生誕百年を記念し、先生の慈しみのこころをこころとして、平成二十四年から二十六年にかけて記念事業を行い、先生のご遺志を世に広く弘め、公益に資するような活動を展開していきたいと鋭意計画を練つております。読者の皆様の中に、もしこのような目的に相応しいアイデアをお持ちの方があれば、是非私どもにご提案くださいますようお願い致します。

第三回神儒仏合同講演会



七月三十日(土)、東京都千代田区の神田神社祭務所ホールにおいて、約百五十名の参加者のもと「心の通い合いを求めて「災害と企業倫理」をテーマとする神儒仏合同講演会が開催された。まずは神道の立場から藤井隆太氏(龍角散代表取締役社長、東京生薬協会会長、神田法人会副会長)が「生命関連企業の責任とセルフメディケーションについて」、続いて仏教の立場から安原和雄氏(足利工業大学名誉教授、仏教経済フォーラム副会長、元毎日新聞論説委員)が「日本再生と企業倫理」、最後に儒学の立場から瀬口龍一氏(日立建機名誉相談役、日本バリユー・エンジニアリング協会会長)が「孔孟に学ぶ企業倫理」という演題で各々講演された。

その後、司会者の吉津宜英氏(駒澤大学仏教学部教授・仏教経済研究所所長)が総括的な論評を行った。さらに、前田専學理事長、大鳥居信史氏(神田明神宮司)らが挨拶し、奈良康明常務理事により締めくくられた。

神田明神(神道)、湯島聖堂(儒学)、東方学院(仏教)による神儒仏合同シンポジウムは、二〇〇八年六月八日に三法人の地元ともいえる東京・秋葉原で起きた無差別殺傷事件をきっかけに始まった。事件は、現代社会から人と人との繋がりが失われ、特に若者たちが孤独に追いやられていく現状を浮き彫りにしたが、三法人は、こうした状況を少しでも良い方向に変えていくためには、立場の違いを乗り越えて協力すべきとの考えで一致し、現代社会を考えるために「心の通い合う社会を求めて」他者への関心、「秋葉原事件を受けて」を企画、開催した。幸いこの試みは多くの方々へ支持され、共感を得られたため、三法人は内容をより深めながら今後も継続していくことを決め、二回目となる昨年(二〇一〇年)は「いのちを生きる」をテーマに開催。今後もこの神道・儒学・仏教の三教合同講演会は、ともに時代の問題を考える貴重な場となっていくであろう。

あるべき企業倫理を求めて

神儒仏合同講演会 **災害と企業倫理**

がんばろう日本!

平成23年 7月30日 土曜日

神田明神祭務所ホール
開会 午後1時 定員 150名
(応募多数の場合は抽選)
参加費 ・・・ ¥1,000 (税込)

東方学院仏教彫刻・宗教画講座 第十回研究会員作品展



東方学院実技部門である仏像彫刻講座・宗教画講座が開講され、今年で二十五年目を迎える。作品展は今年で十回目となり、受講する二十代から八十代までの約三十人の作品が展示された。千代田区のインド大使館の地下ギャラリーを会場に、七月十一日(月)～十七日(日)の期間中、約八十点の個性豊かな仏像彫刻・宗教画が並んだ。

初日のオープニングセレモニーでは、インド大使館一等書記官、前田専學学院長、仏教彫刻講座の西山多寿子、小田谷史弥の両講師、宗教画講座の菅沼荘二郎講師による点火式が行われ、最終日までに約千人の方々を訪れ盛況に終わった。

この作品展を始めた仏像彫刻講座の初代講師である西村公朝師(仏師・一九一五～二〇〇三)は、「土も仏、木も仏、私も仏、そしてあなたも仏。ですからあなたが心を込めて作った仏像はたとえ技術が拙くとも、又、上手・下手に関係なくあなたの仏さまなんだよ」と言われていた。研究会員は、今もそのご遺志を大切に受け継ぎながら、日々研鑽している。ある研究会員は、「それぞれの仏様が木の中から出てきて戴いたと感謝しています」と仏像を彫る楽しさを語った。展示されるすべての作品に、それぞれの仏への思慕が表現されていた。



新春研究発表会

二月二十一日(月)、東京都文京区の東京ガーデンパレスにおいて、毎年恒例の新春研究発表会が開催されました。

講演の部では、細野邦子研究員が、「アジア諸国派遣留学の成果発表の一環として「東洋の論理と西洋の論理 無矛盾律をめぐって」と題する発表を行い、続いて、佐々木閑花園大学教授が、「大乘仏教の起源について」と題する最新の学術研究に基づく講演を行いました。

本年度の講演には一〇〇名を超える参加者があり、会場は満席となりました。参加者は両先生の講演に真剣に聴き入り、メモを取るなど、熱気あふれる講演となりました。

講演に引き続きホテル内で会場を移して、前田理事長から西村玲研究員に日本学術振興会章の表彰状授与、引き続き財団法人克念社理事長風間眞一氏代理 佐藤和彦氏(庄内銀行東京支店長)とホテルマネージメントインターナショナル相談役比良龍虎氏に感謝状贈呈が行われ、浅井泰範理事による乾杯に始まり、和やかな雰囲気の中、懇親会が開催されました。



「大乘仏教の起源について」

佐々木閑 (花園大学教授)



今回、東方研究会の新春研究発表会でお話させていただくという、大変ありがたく、かつ名譽な機会をいただきました。現在継続して行っている律蔵研究のお話をしようかと思つたのですが、聴衆の皆さんのご意向もあり、十年ほど前に発表した成果ではありますが「大乘仏教の起源」に関する研究について発表することにいたしました。学説の内容に關しては、拙著『インド仏教変移論』で詳細に論じておりますし、それをやさしく噛み砕いた解説は拙著『犀の角たち』の後半部分で語り返した。ここでもう一度それを繰り返す。その要点だけ言いますと、大乘仏教の発生という、仏教史上きわめて重要、かつ特異な現象が起こつた原因は、決して思想的なものではなく、律蔵中の一規定、すなわち「破僧の定義」の便宜的変更にある、というものです。

もう少し詳しく言つと、「アショーカ王の時代、仏教僧団の中で、トランプルを解消するため、ちよつとした規則変更が行われたのだが、それによつて僧団内での多様な教義の共存が許容されるようになり、その結果として本来の釈迦の教えとは異なる様々な主張が並び立つようになつて大乘仏教へと伸展していった」というものです。

この研究により従来不明確であつたいくつかの問題点が解決されます。「なぜ大乘仏教は、般若経、法華経など、系統の異なる様々な教義の集合体なのか」「なぜそれがアショーカ王から紀元前後のあたりに集中して発生してきたのか」「インドの宗教の中でも、なぜ仏教だけが『部派仏教』とか『大乘仏教』というような特殊な形態を生み出したのか」などなど。

学説というものは多くの批判を受け、それに耐えることで強くなつていきます。私のこの「大乘仏教の起源」に関する学説は発表して十年。そろそろ批判も出始める頃です。すぐれた研究者との論理的な論争により、大乘仏教の眞の姿が一層明確になつていくことを期待しています。

「東洋の論理と西洋の論理 無矛盾律をめぐって」

細野邦子 (研究員)



西洋において最初に無矛盾律を定式化したのはアリストテレス(紀元前四世紀)であると考えられています。その定式を、ポーランドの論理学者ウカシエヴィッチは(一)存在論的無矛盾律(二)論理学的(意味論的)無矛盾律(三)心理学的無矛盾律に分類しました。(一)は「同一のもの(属性が同時に同一のもの(基体)に属しかつ属さない、ということとは不可能である」、(二)は「主張 $X \text{ is } P$ および主張 $X \text{ is } \neg P$ が同時に真である、ということとは不可能である」、(三)は「同一のものが同時に定式化されず、(二)は「同一のものが同時にありかつあらぬ」と考えることは不可能である」というものです。このうち(二)は意味論的パラドクスなどにおいて破綻しますが、それをふまえてラム・プリーストは特定の矛盾を許容する論理体系を提出しています。

インドにおいて無矛盾律は、ナーガールジュナ(二世紀)、ニヤヤ学派のウッディヨタカラ(六世紀)やウダヤナ(十世紀)などによつて、存在論的、意味論的、心理学的、語用論的に定式化されました。それらは存在論的無矛盾律を振り処にしていると考えられます。しかしインドにおいても、うそつきパラドクスと同じ構造をもつ意味論的パラドクス、またブリーストが西洋では知られていないと指摘する存在論的パラドクス、さらには肯定的テトラレンマ(四句分別)などにおいて、無矛盾律は破綻します。これらの矛盾と既存の論理体系の關係は未解決です。

東方学院 講師紹介

わがクラス

「生涯学習」と「セカンド・スクール」と

森祖道

(パリー文献協会(英国) 日本代表)



この数年の間、私は原始仏教・南方仏教の学習研究には必須の基礎語学であるパリー語の講読のクラスを、本学院で担当している。クラスのメンバーは、毎年五、六名であるが、皆さん非常に熱心で難解なこの古典語の予習復習に励み、そこで生まれる質問や問題提起は鋭くて深い。

さてこの期間、自ずと明らかとなった研究会員(受講生)の参加目的には次の二つの傾向が見られる。一つは、いわゆる「生涯学習」の場として参加している場合であり、これこそは恩師中村元先生が本学院設立の目的に掲げた理念の実践であると言える。彼らの多くは昨今流行の各種の「カルチャー教室」には飽き足らないレヴェルの人達である。もう一つの傾向は、正規の大学の大学院に在籍しながら、こちらの方も受講するという、いわゆる「セカンド・スクール」としての活用である。その社会的背景としては、最近の大学・大学院では学生に悪しく迎合する形で、とかくカリキュラムが易きに流れ、負担の大きい専門語学の授業を敬遠する傾向が強くなり、その結果専門語学のクラスは質量共に低下しているという事情が見られる。また近年は、同じ専門分野を有する大学の間で履修単位の相互認定つまり互換制度が作られ、それぞれの足らざる部分を相互に補充し合うことになってきているが、実際にはそれぞれが相変わらず閉鎖的であって、折角の制度もほとんど形骸化しているようである。そこでこの様なカリキュラム上の欠陥を自らが埋める目的で、熱心な一部の院生年齢は様々は、修士論文・博士論文作成のために、例えば私のクラスに参加している。また逆に、このクラスより関西の国立大学の大学院へと巣立って行った人も出ている。最近の大学事情を反映した、この様な新しい事態は故中村先生も恐らく予測されなかつた想定外の傾向であろう。ここに本学院に課せられた新しい使命の一つがあると私は考え、彼らの研究の成功を願って可能な範囲で側面援助を心掛けています。しかしそのためには、何よりも先ず私自身が生涯学習の徒たるべきと自戒している。

東方学院に御縁を戴いて

龍口明生

(龍谷大学名誉教授)

二〇〇九年四月からの本学院の関西教室の講師を拝命したのは、思いも掛けないことでありました。東方学院の講師として相応しい内容の講義が出来るのか緊張致しました。その緊張は今も続いています。

これまでの『東方だより』の「東方学院・講師紹介」欄に掲載の諸先生方の自己紹介文を拝読させて頂き、多くは東方学院の創設者中村元先生との思い出を中心語られています。ところで私の場合は、残念なことに中村先生の御講筵に列することもなく、また親しく御教示賜る機縁も御座いませんでした。しかしながら中村先生の御著作から受けた学恩にはただただ深謝致すのみでございます。数多の著書の中でも私にとつて忘れがたく熟読させて頂いた書は『チベット人の思维方法』であります。一九六五年に卒業論文にチベットの仏教、特に戒律を取り上げ、その準備を始めるに際して指導教授から必読の書として、まず推薦されたのが同書でした。その二年後、一九六七年一〇月に日本仏教学会学術大会が比叡山西塔居士林に於いて開催され、中村元先生が最初に「仏教における人間観の特徴」という題でご発表なさいました。尊顔を拝した最初であり、感銘を覚えた記憶は今なお鮮明であります。その後、学会での御発表や御講演で先生にお会いすることは度々ありましたが、いずれも遠くより仰ぎ見る存在でありました。

現在、東方学院関西教室での担当講義は「律文献の講読」ですが、先生の学問に対する姿勢を念頭に置き、教えるというよりも受講生の方々と共に学ばせて頂いております。



今ひとつ思い出されるのは山口恵照先生であります。西尾秀生先生のお誘いにより東方学院関西教室で行われる山口先生のヨーガやインド哲学に関する御講演に出席する機会に恵まれたことです。そしてそれが縁となりインド旅行にもお伴させて頂きました。

中村元先生、ならびに山口恵照先生の学問に対する姿勢、人徳を偲びつつ、この有難い御縁を大切にして行く所存でございます。

東方学院と私

尾山美知子



東方学院に入学した時、生徒の一人から、中村先生の授業をうけたのだと聞いて、うらやましく、もっと早く東方学院を知っていたらよかったのにと思いました。中村先生の講義の力セツトテープを聞きすっかりファンになっていたのに、お目にかかる機会を持てなかつたのは残念でした。

最初の受講は、前田専學先生で、先生の『ブツダを語る』（NHK出版）を読みすすみました。それまで私にとつて仏教は生活習慣のなかでの行動でした。仏教の思想について考えること

ともありませんでした。講義はインドのブツダの時代の社会背景、ブツダの生涯、人間存在について、そして弟子達が教えをうけついでいったこと等々。次第に私の心の中に仏教が大きな流れとなつて入ってきました。

加藤純章先生のクラスでは、中村元著『インド思想史』を講読しました。難しい本が理解できるのかと恐れましたが、初心者でもわかるように教えて下さりました。インドの初期仏教の教えで、十二支縁起について熱心に教えて下さったことは忘れられません。

現在は田村晃祐先生のクラスで親鸞の『教行信証』を講読しています。岩波文庫の金子大栄校訂は大冊です。先生には、私のつたない質問にも、丁寧に教えていただき、またクラスで話し合ったり楽しい授業です。はじめは何が書かれてあるのかも見当もつきませんでした。そのうちに、親鸞の人柄にふれる思いがいたしました。

今年から始まった、マシュー・ヴァーグス先生の「英語による仏教入門」のコースに入りました。プリントをいただきますと、必死で英単語を調べるありさまで。ナーガールジュナがブツダの思想を明かにしていることです。哲学的見地から理解をすすめるようで、これから楽しみにしています。童謡の「メダカの学校のメダカたち、誰が生徒か先生か」、白髪の私が年令も忘れて楽しく学んでいます。この機会をつくつて下さった東方学院に感謝いたします。仏教の学びは楽しいと、東方学院の生徒さん達も同じではないかと思えます。

研究会員の声

東方学院に入学して三年目

下田 勇人

現在、前田先生の「インドの思想と文化」と「仏教入門」を受講しております。講義のある月曜日が毎週楽しみです。仕事をキツチリ定時で切上げ、神田明神近くのビルまで早足で通つてます。講義は、難しい内容でも穏やかに説明していただので解りやすいです。後で復習しようとするとき実は理解できていないことも多く、勉強が足りないといつも感じます。それでも、勉強することが面白く、気が付けば入学してからもう三年目となりました。

私は三十代前半なのですが、クラスの中では若い年齢らしく、他の研究会員の方に珍しがられることがあります。現在の日本では、仕事や家とは関係がなく、人生について深い悩みを持つているわけでもなく、平均寿命まで半世紀近くあるのに、宗教に興味を持つことは不思議なことなのかもしれません。大学では心理学や社会学といった分野を専修していましたが、講義をサボることしか考えていない勉強嫌いの学生でした。

東京という様々な国の文化が入り混じっている都市で就職後も生活し、海外に住む友人と話したりしているうちに、「日本人」とは何であるかという疑問を持つようになり。日本人の宗教は仏教なのかしらと思つて図書館に行き、中村先生の書かれた本にたまたま出会ったのが東方学院に通うようになったきっかけです。原始仏教は、それまで自分が想像していた説教臭いものや胡散臭いものと違つていて驚きました。「人間」や「自分」や

「心の動き」といったようなものを冷静に丁寧に非常に鋭く観察したことが簡潔にまとまつており、二五〇〇年もの昔にできたとは思えないほど新鮮で感銘を受けます。

もっと深く原始仏教について学んでいきたいと思つてますが、同時に、自国の文化を知るためにも今日の日本の仏教へと変容していった経緯や、原始仏教のような哲理が起きたインドの哲学についても、詳しく知りたいとますます興味を膨らんでいます。



研究員紹介

智慧と慈悲

武田 浩学

財団法人東方研究会に研究員として在籍するようになった時は、今より七年前の二〇〇四年のことです。創立者中村元先生亡き後、現理事長の前田専學先生がその遺志を一身にお引き受けになられた頃であったと思う。それは、順調に学業を終えては無く、フワフワとしていた私が、いくぶん年を取ってから博士論文を書き、幸いにも学位をいただくことができた、その一年後のこと。こうして、未熟ながらも研究を継続していく機会をいただいたおかげで、二〇〇五年に学位論文『大智度論の研究』（山喜房仏書林）を出版することとなった。

『大智度論』は龍樹作と伝わる初期大乘仏教の傑作である。この書に力説されている論点によらなければ、それは智慧と慈悲というふたつの徳をいう、いかなる仏教も人類に開かれた視点をもち得ないと思う。本年一月に請われて台湾を訪問し、玄奘大学などで、この書と龍樹に関するスピーチを行い、彼の地でも非常に関心が高いことを実感した。

とはいえ、『大智度論』は大正新修大蔵経ほぼ一冊分の大論書であり、研究者であってもなかなか読み通すことができない。そこで現在、これまでの成果を最大限に反映させた上で、この書を現代人にあらためて提供するための作業を進めている。また、それとは別に、前田先生のお誘いにより、禪師・鈴木大拙が英訳した親鸞の著書『教行信証』を、新版で刊行する事業にも参加している。

今年の鎌倉・鶴岡八幡宮での東方学院共催講座では、十一月二十七日（日）の午後一時半から三時半に、中村先生の著書『ブツダの生涯』第四章「生きる心構え」を担当することになった。



これは、東日本大震災を経験し、被災した原子力発電所の危機的状況に翻弄されているわれわれ（五月末日現在）が、優しい眼差しでお説きになった中村先生の広げて深い学問成果を、あらためて読み込んでいく大切な機会となるのではないかと思う。そして、そうありたいと強く思っている。

北行して楚に至る

森和也



父が入院していた鳥取大学医学部の附属病院にしばらく帰省して通っていたある日のこと、いつものように売店で新聞を買い、父の病室で広げると目に飛び込んできたのは中村元先生の記事でした。翌年から東方研究会の研究員に採用になることを告げ、早稲田大学文学部の助手を辞めて以降、居場所がないことで心配をかけていた父を安心させていたため、そのニュースを伝えることがためらわれ、畳んだままの新聞を机の上に置きました。父はその年のうちに亡くなり、翌年、私は東方研究会の研究員として正式に着任しました。中村洛子理事長、前田専學常務理事の体制になって最初の研究員ということになります。

大学院の頃から、私の研究は日本宗教思想史という大枠の中で曲折し、通俗神道家増穂残口の色道論を手始めに、武家故実家伊勢貞丈の考証まで手を広げていました。世間的には無名に近い思想家ばかり扱ったのは、後線ばかりを見て裾野を見ないのでは山脈の大きさは分らないという確信の半面、多分に私の反骨に拠るものでした。田村晃祐先生とお会いしたのはその頃です。田村先生は最澄の研究では斯界の第一人者で、本来ならば接点はないのですが、田村先生の講筵に列したの、もともととは制度上の要請によるものでした。指導教員であった菅原信海先生が早大を定年退職され、ゼミ生は東洋大学から客員教授に招かれた田村先生に預けられることになったのです。田村先生は最古参ながら行くあての無い私の身の上を気遣い、中村先生にご紹介して下さいました。この配剤によって辛くも私と東方研究会との縁が結ばれたのです。その後、田村先生が近代仏教に関する著作を出されたことが示唆ともなり、今度は排仏論・護法論を研究の対象として、近年では還俗した国学者伴林光平を素材に、近世・近代の仏教の社会的位置づけを探ってきました。一方で、ある出講先では儒教を教えているような鶴字問ぶりは変わりませんが、いざしかりべきところに落ちてくると、南の楚を指して北行しているところだ。

知識人としての中村先生

高柳さつき



私は大学卒業後、五年間ほど外資系の会社に勤務しており、もう一度学び直したいという漠然とした思いで、またその際、今までと違って役に立たないことを学ぼうと考え、仏教を学ぶことに決めました。

私には大学卒業後、五年間ほど外資系の会社に勤務しており、もう一度学び直したいという漠然とした思いで、またその際、今までと違って役に立たないことを学ぼうと考え、仏教を学ぶことに決めました。

恥ずかしながら生来学問に必要な根気が欠けていたため、学位論文にたどり着くまで紆余曲折がありました。が、学位取得を目前にして指導教官の末木文美士先生のご紹介で東方研究会の研究員として採用していただくことになりました。

それ以前から中村元先生のお名前が、世界的な仏教学者として存じておりましたが、先生の御著書を何冊か読んだのみで、専門分野での業績のみならず、一般向けの啓蒙書も書かれる大学者でいらっしゃるという世間一般での理解でしかありませんでした。

それが少し違った認識を持つようになったのは、ちよつとした出来事がきっかけでした。

研究員のコラム 第7回

閑話本題

東方に入ってからしばらくしたころ、私の学生時代の先輩でテレビ局で番組制作をされている方から、評論家の加藤周一さんが新聞・テレビを問わずジャーナリストを集めて勉強会を開いておられると聞きました。私がその方に「まったく単純な聞き方なのですが」、「加藤周一さんってひとことというどつどつという知識人なのですか」と伺うと、「加藤先生は、英語、フランス語、ドイツ語、古代ギリシア語、ラテン語が堪能なだけだ、ただ話せる、書けるというのではなく、それぞれの言語の背景にある文化とか思想がわかりになった上でのできるんだよね」と言われました。

そしてその数日後、積徳先生から中村先生の話をお聞きした際に、私が「中村先生はひとこと」と同じ質問をしますと、積先生が「中村先生は、英語、フランス語、ドイツ語、古代ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語、パーリ語、中国語ができていたのですが」とまったく同じ応え方をされたのです。私は大変驚き、積先生にそのことをお話しすると、積先生も「そうですか」と言われ驚いた顔をされました。

この際、私は中村先生の学者の一面だけではなく、戦後知識人としてのあり様をほんの少しですが感覚的に理解できた気がしました。加藤周一さんが最晩年までジャーナリストを集めて勉強会をされていたのも、中村先生が東方学院・東方研究会をずっと続けていられたのも、私たちが未来を継ぐ者に対する希望だったのではないかと思うに至りました。

これは私のような力不足の者にとっては大変なプレッシャーではありますが、東方研究会の研究員であることに嬉しさを感じております。この嬉しさと共に地道に研究を続けていこうと思っております。

行事報告

平成二十三年上半期（二月～六月）

第四回 中村元インド哲学カフェ

一月十五日（月）に、京都市左京区にある京都教育文化センターにおいて、第四回中村元インド哲学カフェ「インド人はこう考える」が開催されました。近年、IT産業などで注目されているインドですが、その背景には、抽象的思考に関する長い伝統があると言われています。今回のカフェは、そのようなインド人の思考方法に、いろいろな角度から触れてみようという試みです。

古代インド人の伝統的な思考法では、基体の上に属性がのっているという方法でモノを認識しようとします。佐藤宏宗研究員は、このような思考法を、ぬいぐるみを操作して分かり易く説明しました。また、細野邦子研究員は、「ナーガセーナ長老とギリシャ系のミリンダ王（紀元前二世紀中頃）」との対話を説いた『ミリンダ王の問い』の一節「車のためえ」を取り上げました。ここでは、車体も、車体の各部分（車輪、軸、輻など）も車ではなく、「車はどこにも存在しない」という結論が導かれることを解説しました。

北田信研究員は、手塚治虫の漫画「火の鳥」を例に挙げ、サイボーグとなった人間における部分と全体の問題、及び、命の問題について幅広く説明しました。また、佐久間留理子研究員は、仏像や花の画像を見せながら、感覚器官で捉えられる属性（色、形、感触など）を、すべてモノから取り除いた場合、何かが残ると考えるのが、インドの実在論的な考え方で、何も残らないと考えるのが仏教的な考え方であることを説明しました。

以上のトークに関して、会場からは様々な意見が出され、盛会の中に終了することができました。



研究員総会



六月十七日（金）東京都千代田区にある学士会館において第五回研究員総会が開催されました。この総会は当研究会の更なる発展のため、研究員が一同に会し交流を深めつつ互いに意見交換を行うことを目的として企画されたものです。

当日は約三十五名の研究員が出席し、前田理事長の挨拶に始まり、執行部より研究員に対する通達・要請事項が伝えられました。また、その後、研究会の運営などについて研究員間で活発な議論が交わされました。

平成二十二年年度 芳名録（五十音順・敬称略）

維持会員

赤井士郎 足利学校事務所 石田祐雄 石上和敬 小笠原勝治 風間敏夫 門脇英晴
 金田泉 川崎信定 久間泰賢 来馬明規 黒川文字 小坂機融 小林千桜
 (宗金剛院仏教文化研究所) 齊藤敬 坂部明 清水谷善圭 釈悟震 (株春秋社)
 淳心会(日野紹運) 未廣照純 菅原信海 高崎直道 高松孝行 竹村牧男 多田孝文
 多田孝正 田辺和子 田村晃祐 千葉よし子 中央学術研究所 千綿道人
 (財東洋哲学研究所) 法清寺(奈良修一) 奈良康明 西岡祖秀 西川高史 羽矢辰夫
 報恩寺(藤原敏文) 保坂俊司 前田專學 前田式子 松本昭敬 三木純子 水野善文
 三友健容 三友量順 武蔵野大学 吉野恵子 渡邊信之 渡邊實陽

賛助会員

秋葉佳伸 阿部敦子 石井義長 伊藤瑞嗣 稲葉珠慶 石上智康 遠藤康 大井玄
 大谷光真 岡崎英雄 小笠原隆元 沖本克己 荻山貴美子 桂紹隆 菅野博史
 加藤妙子 金田静江 龜山祥之 北正修 北村彰宏 木村清孝 久保田磯子
 窪田成円 小泉宗之 小林節子 小峰立丸 小山典勇 近藤良一 佐久間秀範
 佐久間留理子 桜井瑞彦 桜井俊彦 定方晟 島田外志夫 首藤光枝 末木文美士
 須佐知行 鈴木勇介 関戸堯海 大海修一 高橋審也 田上太秀 武田浩学
 田中良昭 田丸淑子 田丸守也 田村久雄 鶴谷志磨子 戸田祐久
 長野市南長野仏教会 中村行明 中村保志孝 中山静磨 成田山新勝寺 西尾秀生
 西宮寛 日本ヨーガ学会(田原豊道) 日本ヨーガ禅道院(石田祐雄) 長谷川恵子
 花岡秀哉 濱川量子 引田弘道 日隈威徳 久富幸子 福留順子 福土慈稔
 藤井教公 藤田宏達 藤山寛一郎 堀江順司 堀越教之 松野純孝
 薬師院(松原光法) 的場裕子 往生寺(水野善朝) 三友量順 宮元啓一 森祖道
 長林寺(矢鳥道彦) 山口泰司 山本文溪 横地優子 由木義文 渡部信

東方学院後援会

今宮戒神社 奥田聖應 (学)清風学園 加藤公俊 古泉圓順 坂本峰徳 四天王寺
 四天王寺大学(森田俊朗) 高口恭典 瀧藤尊教 瀧藤尊淳 健代和央 塚原昭應
 塚原亮應 出口順得 出口隆順 唐招提寺 東大寺 念法真教教団 長谷川霊信
 平岡英信 廣瀬善重 南谷恵敬 宮崎光映 三宅光雄 森田祥朗 森田俊朗
 吉田明良 山岡武明

御寄付

小野基 (財)克念社(風間真一) 田辺和子 中田直道 (財)仏教伝道協会
 シンリョウ(比良竜虎) 法立寺 松本昭敬 三木純子 三友量順 森清範 前田專學
 渡邊實陽

皆様からのご支援に心から御礼申し上げます

会員参加へのお願い

財団法人東方研究会からのお知らせ

当研究会では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会员と、当研究会への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がございます。

普通会员 年会費 7千円

普通会员の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当研究会主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

賛助会員・維持会員 賛助会費 1口 1万円・維持会員 1口 5万円

当研究会では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当研究会の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。なお、当研究会は、文部科学大臣から「特定公益増進法人」として認可を受けておりますので、ご寄付金額が2千円を超える場合には、その超えた金額が所得控除の対象となります。

* 詳細は財団法人東方研究会事務局までお問い合わせください。

特定公益増進法人の認定

当研究会は、平成23年7月13日付けで、改めて特定公益増進法人として正式に認定されました。

これまでご尽力いただきました方々に感謝を申し上げますと共に、これからもより一層のお力添えを賜りますよう、何卒お願い申し上げます。

新ホームページ開設 (<http://www.toho.or.jp>)

ホームページを一新しました。

- ・当研究会の目的・理念・歩み
- ・中村元博士の略歴・業績・著作文献目録
- ・東方学院（開講科目、講師紹介、著書紹介）
- ・東方研究会（研究成果、研究員紹介、著書紹介）
- ・公開講座、イベントのお知らせ
- ・リレーエッセイ
- ・チャットの広場
- ・パブリックリレーションズ 等



様々な情報が随時公開されますので、是非ともご覧ください。

東方学院では、各種講座の内容・受講料・お申し込み方法などを記載した『東方学院・受講の手引き（二〇一一年度）』を配布いたしております（無料）。ご希望の場合は、事務局にお申し込みください。

第十二回 酬佛恩講合同講演会のご案内

来る十一月二十六日（土）午後一時より、奈良市西ノ京の法相宗大本山薬師寺において、同寺のご後援の下、東方学院と酬佛恩講共催で第十二回目となる合同講演会を開催いたします。本年は、丸井浩東京大学教授による「インドの合理主義と思想と仏教」玄奘が訳したインド哲学書」と題する講演と、加藤純章名古屋大学名誉教授による講演が行われます。本講座の受講を希望される方は、葉書またはファックスにて当研究会事務局までお申し込みください（お名前とご連絡先を必ず記載してください）。

新任研究員紹介

本年四月一日付で新たに当法人の研究員として採用されましたのでここに報告申し上げます。

【研究員】

上野 敬子

(うえの けいこ)

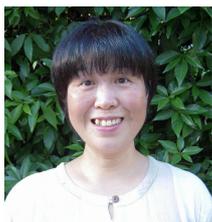
ミューンヘン大学

博士課程修了

Dr.Phil.

【研究テーマ】

インターネット・カルチュラル・フィロソフィーと中村元先生の比較思想研究



東方だより 第十八号（平成二十三年八月一日）

編集／発行 財団法人東方研究会

【事務局】〒101-8302

千代田区外神田一丁十七番二 延寿お茶の水ビル四階

TEL 03-3511-4081